

クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院調査から(1)

著者	黒田 景子
雑誌名	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集
巻	71
ページ	21-45
別言語のタイトル	Siamese and Thai buddhist temples in Kedah : from research report part 1
URL	http://hdl.handle.net/10232/8738

クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院： 寺院調査から（1）

黒 田 景 子

1. はじめに：クダーとシャム

クダー（Kedah）州はマレー半島のタイ=マレーシア国境に接し、現在の国境基本線が英シャム条約（Anglo-Siamese Treaty）で決められる1909年以前はシャム領とみなされていた地域である。この英シャム条約によって、英領マラヤはシャム（Siam）からクダーの他、半島東海岸のクランタン（Kelantan）、トレンガヌ（Trengganu）を得た。シャムは永らくマレー半島中部のマレースルタン候国の港市群を朝貢国（Prathesarat）としていたが、このときパタニ（Pattani）を除いてそれを失ったことになる。

クダーはシャムではサイブリー（Saiburi）¹と呼ばれていた。シャムの朝貢国として認識されていた時期のクダーの領域は、現在より広く、現在のクダー州、ペナン（Penang）州、プルリス（Perlis）州とタイ側のサトゥーン（Satun）県とさらにトラン（Trang）県の一部を含み、クダー国の勢力は時により北部のプーケット（Phuket）島の南部にまで伸長したことがある。

またクダーがいつからシャムの朝貢国であったのかは定かではない。タイ南部の古邑であるナコンシータマラート（Nakhon Sii Thammarat）の歴史伝承の中にナコンシータマラートの所属国としてネットワーク化された「十二支の国」があって、その一つ「Mareng（龍）」の国としてサイブリーが記されており、そのことが少なくともシャムがアユタヤ朝期以来、クダーを朝貢国として見なす根拠の一つとなっている。そして、クダーの仏教国シャムへの朝貢が、15世紀にはさかのぼるクダーのイスラーム化とどのように関わってきたのかは今後も検討されるべき問題である。

しかしここでは、1821年にシャムと交渉する必要に駆られたペナンの英国東インド会社が、英国の対シャム外交方針を決定するにあたり、クダーがシャ

ムの支配地であるかどうかを巡って、会社の官吏ロウ（James Low）とアンダーソン（John Anderson）の間で、一時激しい論争が展開されたことを記しておくに留める。

この論争は、英国の交渉相手として、クダーの政治的代表的権をクダースルタンにあるとするか、シャム中央政府にあるかを論じたものである。シャム側は「クダーはシャムの朝貢国である」と認識し、その証左をブンガマス（Bungamas）というクダーからのシャムへの定期貢納が長年慣行されていることとした。一方クダーのスルタンはこの貢納儀礼はシャムへのクダーの単なる「友好の印」と主張した。

クダーの政治的な支配権はスルタンにあったものの、シャムは貢納が途絶えたことをスルタンの背信と見なして1821年にクダーへ制裁攻撃をおこなっており、その問題を解決するため、会社は「クダーが独立国か否か」という立場を明確にしなければならなかった²。

結局、クラウファード（John Crawford）がシャムへの交渉に向い、現場の政治的駆け引きから、シャム中央政府をクダーの上部支配権者である、との立場をとって1822年の Crawford 条約が成立した³。アンダーソンはあくまでそれに反対した。後にシャムとクダーの政治的な関係をあらためて検討したスワンナタットピラム（Suwannathat-Piam）はこの朝貢関係について、現実的支配権を伴わない「名目的支配」であったと表現した。基本的にシャム中央政府はクダーの内政問題には興味を示さなかったからである。このような関係は前近代的な国家間関係でしばしばみられる間接的支配、分節的な支配のシステムの典型であった。

ではクダーの地域や集落における現実のシャムの影響、あるいはタイ人とマレー人の相互の関係はどのように捉えればいいのかであろう。

クダーは確かにスルタンによるマレームスリム社会を中心とする政治、社会組織をもったイスラーム国家ではあった。しかし、その一方、タイ語に由来する多くの地名や、英国官吏達がサムサムと記録したタイ語を日常語とするムスリム達の集落の存在があり、そして、マレー村落に混じって、タイ人

(シャム人) 村落の存在が報告されており、シャムの文化的影響がみられる地域である。シャムとの関係は、集落レベルでは名目的とばかりはいえまい。

本稿は、このようなクダーとシャムの関わりを、長期的な視野で、なおかつ地域の特性である「境域」という視点から分析しようとする研究の一環である。

ここでいう「境域」とは具体的には、仏教徒の世界と、ムスリムの世界、タイ語の世界とマレー語の世界の混在する、モザイク状の集落居住の存在する地域を指している。

この「境域」の誕生は近代以前にさかのぼり、近代的な国境定義、あるいは国境管理にとってはやっかいな存在だが、実際には様々な人と物資の行き交う緩衝地帯である。境域には、東海岸のパタニのように、紛争の要因が存在し安全保障上の問題となる場合もある。しかし、クダーや同じくクダーの一部であった西海岸の現タイ国のサトゥーン県では、いわゆる民族や宗教を要因とした紛争は生じていない。

クダーの場合、スルタンとシャム政府の政治的な駆け引きではなく、村落のレベルで両者の関係を考察するならば、クダーにはどのように「シャム」の姿が見えるのか。現在のクダーはマレーシアの州の中でもマレー人人口割合が高い地域である。シャム人人口は少なく、しかし華人やインド人と異なり、先住民族であるブミプトラと認定されている。いわばクダーのシャム人はブミプトラの中のマイノリティである。

本稿では、村落レベルの情報については不足しがちである歴史的資料を補うために、クダーのシャム人村落の状況を、フィールドワークによって情報収集できないかと試みている。

筆者は1990年代に、クダー北部地域のサムサムこと Thai-speaking Muslim についてフィールドワークを行い、これらのサムサムと呼ばれる人々が南タイからの段階的な移住者であり、その歴史が朝貢経路と一部連関していることを解明してきた。今回は、同じく日常語がタイ語話者であるクダー州のタ

イ人に注目し、彼らの村落に殆どといっていいほど存在するタイ上座仏教寺院の調査を行った。

本稿の主要部分は、現クダー州において2009年現在存在するおよそ40を越えるタイ仏教寺院の訪問調査記録である。広域調査であり、個々のケースについて緻密な調査ができたとは言い難いが、まずはクダーのタイ人についての研究の鳥瞰図を示すことを目的とする。

なお、繰り返すがクダーのタイ人は多民族国家マレーシアにおけるブミプトラであり、自らをタイ人とは呼ばず、シャム人と称することを好む。よって、本稿では彼らをシャム人として記録する。

2. クダーのシャム人に関する資料について

クダー州のシャム人居住についての歴史資料情報は極めて少ない。簡略に言えば、マレー語の歴史資料やタイ語の年代記資料の記述は、朝貢関係など支配層を巡る政治的事件に描写が偏るからである。村落部のシャム人やサムサムについての記録はほとんどない。村落部のシャム人の存在については、19世紀になって英国官吏の一部の記録に言及があるにすぎない。

重要な資料としては、クダーがシャムの朝貢国であった1890年と92年に、シャムの指示により、クダー領内のタイ寺院と所属僧侶のリストが作成されたものがある。同時期タイでは寺院とその僧侶数に関する公的な把握が目指されており、この資料はその一環と思われる。結果的に公的な文書ではおそらく初めてのタイ寺院の記録となった。この資料においてはわずか12の寺院名しか記録されていない。

英領マラヤ政府は1911年にクダーとプルリスに関するセンサス調査を行い、ここで、はじめて広域調査対象となるシャム人の数が把握された。このセンサスはクダーの民族分類定義を行い、マレー民族の下位民族概念としてのサムサムをも定義し、なお、使用言語調査を行っている。この資料により、クダーとプルリス領内のシャム人の大まかな居住分布を知ることができる。シャム人の居住は、いわゆるクダーの「内地 (Inland)」に偏るが、マレー人

とシャム人の人口分布の詳しい分析については稿を改めて論じたい⁴。

村落居住のシャム人についてこのように情報が少ないのは、彼らがクダールの支配層に属さず、また、人口としても大多数であるマレー系が主体となるクダーにおいては、マレーシアの独立後もプミプトラであるも係わらず、タイとの境域における地方的なマイノリティであったためと考えられる。

1974年に出版された『マレーシアのタイ人』（タイ語資料）はタイ人仏教徒によるマレーシアのシャム人とその村落、タイ仏教寺院の貴重な訪問記録である。記録自体は、1963年のものである。これ以降、クダーにシャム人の大きな村落が存在することが知られるようになり、南部タイで発行されている学術雑誌などにその一部の村落への訪問記録などが1980年代に散見されるようになる。

筆者は1990年初頭に、クダーの北部境域で、南部タイから移住してきた伝承をもつタイ語話者であるムスリム、サムサムのフィールド調査を行ったが、その時、クダー中部のプンダン郡（Pendang）に北部とはまた別のサムサムの村落グループとシャム人村落が近接した地域があることを知った。古老の記憶では、この地域では1930年代まではサムサムとシャム人の婚姻やサムサムがシャム人の祭りに参加するなどの交流が見られたという。この地域のサムサムは北部クバンパス地域のサムサムと異なり、移住者としての記憶がもはや存在しない、あるいはより古い時代の移住者であると称する。

筆者は、これらクダーのタイ語話者について「サムサムとシャム人」でその伝承から伺える歴史について、センサスの分析と断片的な公的資料を用いて小考をまとめた。しかし、クダーのシャム人の全体像を把握し、かれらの歴史的経験の証左にはまだ多くの情報が不足している。

筆者は2007年から2009年にかけてクダー州において、数回の現地フィールド調査を行い、クダー州の全タイ仏教寺院を訪問し、聞き取り調査によるシャム人の伝承や実態について情報を収集した。本稿はその成果の一部である。

3. 研究の手法と調査地域

さて、上座仏教徒にとっては寺院は生活と切り離せないものである。出家者である僧侶の衣食住は在家者の世話と寄進に支えられており、寺院と僧侶の存在は、在家者の日々の精神的よりどころとなる。クダーにおけるシャム人もまた多くが上座仏教徒であると思われ、寺院は一般的に在家者の村落とそれほどかけ離れない場所に建設されることから、筆者は寺院がシャム人の居住地域の示標となると考えた。寺院の分布はシャム人村落の分布とほぼ一致するとおもわれると推測されることから、調査では、できるだけ新しい寺院リストによって、全寺院の所在確認を行った。

そもそも、クダーのタイ上座仏教寺院は、1890年の公的文書のリストでは現プンダン州を中心として所在が判明しているだけでは8つが判明している。その後の資料では、寺院数は緩やかに増加している。1911年のセンサスでは15の数が記載されているが所在地は不明である。資料としては英領マラヤ作成のクダ地形図を入手しそれを軍用地図として転用した1939年の日本軍の『外邦図』も参考になる。この地図では、その後ダム湖の下に水没したシャム人村落の存在や、すでに荒廃して破壊され、サムサムの老人の記憶で語られた（現在は廃寺になった）仏教寺院の情報も含まれていた。

マレーシアのタイ仏教協会は1985年に所属する寺院リストを作成した。クダー州寺院はそのとき既にクランタン州を抜く38寺院が記録されていた⁵。

2007年には、クダー州タイ人協会のWebサイト上に寺院リストが登場し、さらに、それを元にして情報を更新したらしいタイ仏教の在家者が買い求める仏教の護符に関する情報サイトにマレーシア各州のタイ上座仏教寺院リストが公表されている。

今回調査の基礎資料としたのは、この情報サイトのクダー州寺院リスト ([http://www.mir.com.my/leofoo/Thai-amulets/htmls/Wats/kedah, htm](http://www.mir.com.my/leofoo/Thai-amulets/htmls/Wats/kedah.htm)) である。

この資料ではクダー州の寺院は、正式に住職のいる寺 (Wat) 38と住職のいない寺院 (Samnaksong) 10を合わせて、48が記録されている。なお、

Samnaksong と記録されているが、事実上 Watとして扱われている規模の大きなものもあり、また、このリストに記載されていない小規模な Samnaksong (寺務所) もある。

調査では、Wat のすべてと Samnaksong の一部を合わせたクダー州の44寺院を回った。さらに、ペナン州の寺院2を加える。主な調査項目は、寺院の所在緯度経度と立地状況と寺院内構造物、周辺村落、僧侶や住民、寄進者への聞き取りである。調査した時期は僧侶の雨安居中と雨安居開けにまたがることによるため、僧侶が不在の場合などもあり、情報としては不完全な部分があるのは否めない。

4. クダーのタイ寺院に関する総説

網羅的に調査を行ってみると、クダーのタイ寺院はその建立時期や規模、それを支える村落や在家者像などにかかなりの多様性がある。300年以上前の建立を主張する寺院や集落もあれば、30年ほど前に建てられた簡素なものもある。あるいは、質素ながら土地のシャム人集落の出家者と在家者によってしっかり支えられている寺院がある一方、上座仏教寺院ではあるが僧侶も華人系で、ほとんど華人系の寄付者によって支えられ、今なお寄進像が増殖しているきらびやかなものなど、近接していてもまったく違う様相をみせる寺院などがある⁶。

寺院を支える集落によっては、500年以上前から存在していた伝承をもつ集落が内陸地域を中心としていくつか存在する。門に集落と寺院の記録を300年と記す寺院 - Wat Kura の例 - があるが、それを示す文書は存在しない。

古い伝承をもつ寺院に由来を示す遺物や文書が所有しない理由は、タイと英領マラヤとの境域であるこの地域が経験した20世紀半ばの歴史的試練に由来すると僧侶や集落の人々は説明する。

すなわち、1909年の英シャム条約により、タイの朝貢国サイブリーは英領マラヤの一員であるクダーとなった。そのことが真っ先にもたらしたのは線的国境の監督と維持である。境域の人々はマレー人もタイ人も含めて設定さ

れた国境線の両側にまたがる生活圈を持っており、その交流はこの国境線の設定以前はかなり自由なものであった。国境が設定されたところでその交流が遮断されるものではなく、英国が組織した警察と国境警備隊は、「越境強盗」の摘発と追跡に20世紀の前半はかなりの時間を費やしている。事実1930年代までのクダー、特に内陸部と国境域はマレー、タイ、華人を問わず、無法地帯「バンディットエリア」として認識されていた。[Cheah 1999]

さらに、1942年12月8日、日本軍はマレー半島東海岸のソクラー（Songkhla）とパタニ、コタバル（Kota Bahtu）から上陸を開始し、ソクラーに上陸した部隊はクダー州のジトラ（Jitra）とアロースター（Alor Star）の英軍基地を攻撃して南下した。また日本はタイに旧朝貢国であったクダー（ブルリス含む）、クランタン、トレンガヌをタイ領として与えたため、1942年には日本軍の南下のあと、タイ軍が侵入した。マレー人村落ではタイ軍の侵入と村への略奪を恐れて森に身を隠した。

クダーがタイ治下にあったのは日本軍が敗北する1945年までで、その後クダーは英領マラヤに復帰した。しかし、タイ軍が去ったあと、クダーの国境地域には武装闘争を宣言していたマラヤ共産党が潜んでいた。英領マラヤ政府は、この武装組織への物資供給を絶つために、1952年には国境から20km以内の集落を強制排除して住民を移住させるいわゆるニュービレッジ（New Village）政策を行った。マラヤ共産党の支持者が華人中心であったため、華人集落を標的にしたともいわれる強制移住対象集落はクダー州の場合、地理的要因からもシャム人集落と寺院、サムサム集落を含んでいた。強制移住の現場では、元の集落はマラヤ共産党のアジトにならないように、という理由で集落は破壊され、そのまま放置された⁷。強制移住期間は約5年に及んだ。中には移住を拒否し、家畜の世話や農地のために元村に無断で帰った住民もある。また放置された集落では、野生の象が入り込んで農地を荒廃させたとの報告もある。

移住のための準備期間はほとんど与えられず、内陸の古いシャム人集落や寺院では、ほとんどの財産、家畜などを放置したままで移住先に身を寄せね

ばならなかった。寺院そのものが英軍によって放火破壊された例もあり、この時期に古い資料は失われ、また、集落が瓦解し、元のようにはならなかったところもあった。

クダーのシャム人にとってこれは過酷な試練の時期であった。1963年にクダーのシャム人集落を訪問した報告には、5年の後、元の村に帰った人々が寺院を再建し、集落を立て直した経緯が描かれている。

したがって、古い寺院や集落の場合でも、建造物そのものは1950年代に再建されたものであったり、放棄されているケースが見られる。また、帰村を諦めて移住先におちついたシャム人の福利厚生政策の一環として移住先にクダー州政府が新しく寺院や学校を建てたケースもある。

マレーシアが独立すると、これらのシャム人はプミプトラの一員と見なされたがプミプトラの中のマイノリティであった。寺院はタイ語教育の場でもあったが、タイ語教育だけでは政府の援助は得られず、マレー語教育をすることが学校建設の条件とされた。これを受け入れて寺院敷地内に学校建設を行った地域もあったが、小規模な集落と寺院ではタイ語学校が維持できなくなった。

1970年代以降になると、木造寺院のコンクリート造りの寺院への建て替えや、シャム人集落が僧侶を招いて新しく寺院を造ったりする例が見られるようになる。それまでに記録されていなかった地域にも寺院が誕生する。

その後、80年代後半からはマレーシアの経済状況の好転により、寺院を訪れる華人系の参拝者が増える。華人系の寄進者により、1990年代からは、華語の看板や案内、さらに寺院に新しい建造物が増加する傾向がある。集落の人々の寄付や外来者の寄付によって本堂を建て替える規模の大きな寄進計画もあれば、仏像やさまざまな縁起像を寄付する例も多い。寄進は個人や企業が独自でおこなう場合もあるが、寄進委員会を作ってそれに参加する例もみられる。寺院内に銘板が掛けられ、寄進者の名前と寄付金額が記されたり、寄付物に直接銘板がつけられる。

このように現在のクダーのタイ寺院には、

- 1) 近接するシャム人集落があり、寺院と僧侶がかれらの日々の世話によって成り立ち、境内の施設や設備は最小限の質素なもので占められているが、寺院での活動が集落の人々の生活の中心となっているケース
 - 2) 華人系の参拝者や寄付者が多く、僧侶自身も華人系であってタイ語を理解しない場合もあり、境内には華人的な納骨堂や廟、派手な装飾を施した民間信仰的な寄付像、占いの道具などが溢れているケース
- という両極の傾向がみられる。

これらの寺院の盛衰は強制移住時代の経験と、特に2000年以降のクダー州の道路整備を主とする大規模な再開発計画によって、さらに大きな影響を受けつつある。この結果、シャム人の居住地域の特徴や移住者の経路をたどることのできる歴史的な景観なども激変をとげつつある。車道の整備によって華人参拝者の増えた寺院もあれば、交通路の不便さから過疎化の進むシャム人集落もある。

これらの寺院と集落の研究においては、個々の寺院と集落を調査することも重要であるが、同時に鳥瞰的な視野で寺院群全体をとらえることも必要である。クダーの寺院のあり方は多様であり、筆者は分類に至るにははまだ調査の不備を感じ、寺院と集落の状況の変化の速さに応じた慎重な扱いが必要であると感じている。

5. 寺院の基本的構造

クダー州におけるタイ寺院はなにをもって寺院として成立しているのか、まずはその基本的な構造について述べる。

1) 名称

調査した44の施設は、一つを除き、すべてがWat（タイ語で寺の意味）と呼ばれていた。たとえば、Felda Gua Napai にある寺院は Wat Gua Napai と呼ばれ、正式名称としては Wat Sirinikom Vanaram である。しかし、正式にはまだ Wat としての体裁をなしていないとの理由で、寺院としては

Samnak あるいは Samnaksong と呼ばれる。

クダールの寺院で Wat と呼ばれる条件は、寺院内に定住する住職がいること、Ubosot (本堂) と Kuthi (庫裡) があることである。短期出家者がある期間のみ、他の寺院から僧侶が来ている場合などは Samnak の扱いとなる。

多くの寺院が、寺院としてのタイ語の正式名称を持っているが、集落の人々には通称名で呼ばれている。寺院名は門や所在指示の看板にタイ語、ローマ文字、漢字で示されていることが多い。本稿では、これらの寺院を通称名(ローマ字使用)で記載する。

2) 立地

クダール州はマレーシアの穀倉地帯としても知られる。半島の海岸から約 15km 内地までは標高 5m 以下で、いまでも雨季にはしばしば道路が冠水し洪水となる。このグラム湿地帯には 18 世紀からマレースultan とその重臣によって排水運河が造られて開拓がすすみ豊かな水稻地域となった。1777 年以来スultan の都であり、現在の州都であるアロースターもこの地域に存在する。1911 年のセンサスではマレー人人口の多くはこの地域に集中している。一方、クダール州のタイ寺院はアロースター市内の少数を除き、その殆どが、標高が 15メートルから 100メートル以上に至るより内陸の丘陵の農村部に存在する。この地域も水田地帯であるが、水田には段差が作られ、大規模な運河は存在しない。

タイ寺院、特に 20 世紀前半までに存在が確認されている寺院群の立地の特徴は、河川に面していることである。

クダールは港市国家でもあり、主要河川としてクダール川とムダ (Muda) 川をもつ。アロースターはクダール川の河口から 7 km さかのぼったところにある都市である。

タイ寺院はこのクダール川に流れ込む支流である、プンダン川 (Sungai Pendang) やそのさらに支流、大河川であるムダ川に面した地域に集中的に存在する。特にムダ川は、水源をタイとマレーシアの国境あたりの標高 250m

のあたりとし、クダーの中央を南北に大蛇行しながら、マラッカ海峡の河口クアラムダー（Kuala Muda）のジュライ（Jurai）山の麓の湿地帯に至る。ムダ川の河口湿地地域は7世紀から11世紀にかけてのインド系遺跡が点在し、クダーの歴史ではイスラーム化以前の王（Raja）が首都としていたという伝承をもつ。

タイ寺院はこのように、基本的にクダーの河川交通につながる場所、あるいは、タイのソクラーとアロースターを結ぶ古い朝貢道路であるサイプリー道路沿いにある。シャム人の集落は農村部では基本的に寺院に隣接している。1950年代以降、河川交通の利用が無くなったために却って陸路交通では不便な位置に立地している例も少なくない。

3) 寺院施設

タイ寺院の敷地は現在ほとんど塀で囲われているが、農村部の寺院では敷地の平均は16キロ平方メートルから20キロ平方メートルあり広い。

基本的な敷地内構造物としては、Ubosot（本堂）、Kuthi（庫裡）、Sala Palien（説教序）、Wihan（礼拝堂）、Ho Trai（経堂）、食堂・台所などがある。Ubosotは殆どが現在はコンクリート造りになっているが、バイセーマー（bai Sema）を設置して本堂を囲み、聖域を示しているものが多い。しかし、格の高い寺院としての様態を示すバイセーマーを持つのは、ごくわずかな寺院だけである。ごく近年に建設されたものは、バイセーマーを持たず、塀で囲みただけである。また、庫裡などは数人の僧侶が共同で住んでいる大きなものから、見習い僧（Sami）や短期滞在の僧侶がつかう個人用の木造の小屋まで、複数の施設が敷地内に存在する。

居住施設以外で重要なのは、学校である。学校すなわちタイ語学校を持つ寺院は限られている。タイ語学校は寄付者の援助でまかなわれており、教師はタイ国から教科書を持ち込む。集落のシャム人は日常的にはタイ語の南タイ方言を話しており、文字を使うことはない。学校のない地域、学校に行くことができない奥地のシャム人集落では標準タイ語の読み書きができないも

のが少なからずいる。タイ語の教師はタイからやってきている僧侶が行うことがほとんどである。クラスはタイの教科書を用いて4年間行われる。ただし、教師が居なくなったりして学校はあるがクラス閉鎖中である例も見かけた。

その他寺院でよく見かける建造物としては、鐘楼/太鼓楼、先代住職座像、仏塔、プラメーン（住職の墓）がある。

華人の多い街中の寺院では立派な納骨堂を持つところがでてくる。これらの管理は在家の組織が行い、寺院内に場所を得ているだけである。

ただし、外からの参拝者が増え寄進者が増えてくると、これらの建造物以外にさまざまな寄進像や民間信仰に由来する建造物が増えてきて、なかにはかなり強烈な印象を残すものがでてくる。

目につく寄進像としては、四面仏（Phra Phrahom）、巨大仏（寝釈迦、修行僧像）、観音像、ルシ（Rusi）像と洞窟、誕生日を象徴する7つあるいは8つの仏像、釈迦の一生を模したコンクリート像群（建物内の壁画の立体版でもある）、さまざまな招福像（ガネーシャ、Nang Kuwak 像、布袋像、三つ足の蝦蟇等）、ダトクラマツト（Datuk Kramat）、池と噴水、クアン（善霊廟）、その他護符で知られるピッタ（Pitta）像、象、鷲、猪、などの動物像などある。

四面仏というのは、地元のシャム人にとってはタイ寺院である印としてとらえられており比較的早い時期に寄付されるものである。バンコクのものが有名だが仏像というよりバラモン教の梵天立像である。また、ルシ像もその意味では仏教ではないが、ほとんどの寺院に手作りで作られて祀られているものである。ダトクラマツトも特徴的な民間信仰像である。ダトクラマツトはダトコン（拿督公、あるいは Na Tuk Kong）とも呼ばれ、マレーの衣装を身につけ片手に金のインゴット、片手にクリスをもった華人系とマレー系の混じり合った姿をしている。土地神信仰とむすびついている。ルシ像とダトクラマツト像は土地神の祠に収まり日々人々の信仰の対象となり線香が絶えない。さらに招福像群となると、タイ系、華人系、インド系さまざまな要素が混じっており、華語の説明書きも付されている。

また、寺院敷地内の片隅に大乘系の阿弥陀仏像を祀る一角や、華人廟と敷地がつながっている場合もある。

これらの寄進像や廟については、基本的に僧侶は係わらない。在家者の行動であるとして、関知も拒否もしない例が普通である。

4) 在家者との関係

寺院の建設と僧侶の招聘は集落の在家者の要請による。近接するシャム人集落の規模が大きいと住職もまたその集落出身者である場合が多いが、小規模になると、僧侶をタイから招く場合もある。タイから来た僧侶ではすでに30年以上その寺院に居るものもあれば、半年や1年で入れ替わり立ち替わり去っていくものもあり、とくにタイのバンコクや中部からやってくるタイ人僧侶は、地元のタイ語を理解できない場合があって、しばし苦勞する。また、タイ上座寺院ではあるが、僧侶も在家者もほぼ華人系で、タイ語をつかうものがほぼ居なくなっている地域もあった。

寺院の建て替えなどは、小規模寺院では僧侶と地元のシャム人の手作業で何年もかけて行われる。若い僧侶自身はその建築に携わっている場合もある。また、一方で1990年代からは、明らかにタイ国からの労働者、技術者による意匠をほどこした寺院建築が目立ってきている。寄付を募る案内が出され、ある程度の資金が集まると、僧侶が寺院のデザインを決める。寺院のデザインは僧侶自身の希望によるものなので、その僧侶が訪問したタイ寺院のデザインを所望することもあれば、独自のデザインをする場合もある。変わった例では、タイ北部出身の僧侶が永く住職を勤めている寺院には、材料をすべてビール瓶で作った建物があった。正式な本堂ではなく、集会所や祠に使っていた。このような寺院は二カ所ある。もとはタイでもビール瓶や酒瓶でつくった寺院が有名であり、それにならったものらしい。

通常は僧侶のデザインをタイから呼んだ寺院建築の設計士に任せて設計図を貼りだし、それにしたがって、地元のシャム人とタイから呼んだ労働者によって共同作業で建築を行う。タイからきた労働者は一人から数名おり、ピ

ザを一年ごとに更新しながら寺院内の空いている小屋で寝泊まりする。一つの寺院の門を4名で建築している場合でほぼ2年かかり、大きな本堂だと3年から6年をかけている。タイからきた労働者は一つの寺院の建築が終わると、たのまれて次の寺院の建築にとりかかるともある。近年ではこういうケースが多くなったようである。

寺院は集落の集会所でもある。寺院の年間行事では、いわゆる仏事日であるウェーサカ (Wesak) 祭, 雨安居の入り (Khao Pansaa), 雨安居の終わり (Ook Pansaa), とカティナ (Kathina) 祭, の他に, 在家シャム人の祭りである, ソンクラーン, ロイカトーンなども行われる。華人が多い地域では, 華人正月も行事の一つとなり, ダトクドラマットの祭りも行事カレンダーに入る。

ソンクラーンの行事は, 行うところと行わないところもある。ロイカトーンも同様である。ロイカトーンの場合には同時に境内に市がたったり, タイから楽団を呼んだりする場合もある。タイ由来の芸能であるマノーラ (Manora) の踊りのグループを持っている集落が2つあり, それらが演じられる。また, おなじ行事でも, 華人の為の華語カラオケの日とシャム人のためのタイ語カラオケの日が分けてあることもある。シャム人の祭りに関しては, ある程度の制約がある。すなわち, マノーラ踊りは行事として許可されるが, ラムウォンの踊りは「マレーシア的ではなくタイ的である」との理由で上演が許可されなかった場合がある。

マレーシアでの「シャム人」という呼称に彼らがこだわるのも, この例から推しはかれるように「タイ」ではない「シャム人」としての立場が強調された結果である。

また, 学校の有無にかかわらず, 境内にはサッカー場やタクロコートがつくられていることが多い。クダーにはシャム人の NPO 団体, 「マレーシアシャム文化協会 (PEKEMAS)」があるが, その主催者は当初「クダーシャム人青少年サッカー振興協会」として集会活動をはじめている。シャム人の福祉事業として寺院敷地内を借りてスポーツ振興という形式でのシャム人の集会の許可を得た。民族問題に敏感なマレーシアでのシャム人団体の現状でも

ある。

タイ寺院の出家者、僧侶（Phra）、修行僧（Sami）の衣食住は在家者に支えられているが、クダーの寺院で特徴的なのは、僧侶が托鉢にでないことである。僧侶の食事は村人が作る。寺院内に台所と食堂が必須である理由である。住職が一人である場合には、作った食事を運んでくることもあるが、短期出家の修行僧がいたり、僧侶が多いと、寺院内の台所で食事を作る。この方法はクダー州だけではなくペナン州のタイ寺院でも同様である。集落では食事をつくる担当がきまっており、独自のカレンダーでその順番をはりだしているところもある。また、臨時の参拝者が食事を持ってくるタクバツ（Tak Bat）もある。食事ができあがると、まず僧侶が席について経を唱えてから食事をし、また15分ほどで食事を終えて経を唱えて席を立つ。そのあいだ食事を作ったものは床で読経に手を合わせて、僧侶の食事が終わるまで待ち、僧侶が立ち去ると、そのあと、自分たちも同じ場所で食事をする。集落の短期出家者が居る雨安居の時期には、出家者の家族も食事の用意に加わり賑やかになる。

集落に死者が出た場合、僧侶は呼ばれて死者の家に経をあげにいく。三日安置したのち、再び経を上げて、火葬が行われる。マレー人の多い農村部では火葬場は限られているので、それも寺院とその集落の関係に深く関わってくる問題である。都市部の寺では葬儀の際も僧侶の経をもらいに死者の家族が霊柩車に乗せた棺とともにやってくる場合もある。都市部の寺院では納骨堂が境内にあり、それを利用しているのは華人系が殆どである。また、境内の住職の墓の周辺を整備して華人形式の墓が林立する寺もある。

集落以外の参拝者としては、華人系が圧倒的に多い。アロースターやペナン、クアラランプルから、福建華人の家族、家族の先祖にシャム人がいたというような家族がしばしば寺院を訪れる。もっとも多いケースは先にのべたタクバツである。食事や果物、菓子、油など僧侶の生活に必要なと考えられるもの、寄付金、寄付物を車で運び、家族親戚で乗り合わせてやってくる。彼らは住職の元でまず、寄付をならべ、住職から読経を受け、聖水を振りかけもらう。その後、集落の人々と同じく、食事の用意に加わり、共に僧侶の

食事を見守ってそのあと集落の人々とともに食事をするのである。

このような参拝者の一部に聞き取りをしたところ、きまった寺院に毎回くるといふ家族もあれば、所在の分かる寺院を探してタクバツ旅行をするものも居た。また、寺院によっては、占いや入れ墨がうまいという評判が立っていて、タイから信者がやってきている例もある。タイ仏教に興味をもつ華人が多いのかタイ寺院や高僧についての専門雑誌（華語）もまた何種類かあって街の書店・雑誌スタンドで容易に入手できる。

6. クダーの各地域の寺院データベース

本調査では、2007年から2009年にかけて短期滞在調査を繰り返して、クダー州の全タイ仏教寺院とペナン州の寺院の殆どを調査した。調査項目としては完全なものではないが、近年はこれらの寺院について網羅的な情報が存在しないのでここにデータベースとして記すことにする。

寺院はほぼ北部の郡（Daerah）別に記載する。なお、前述したように、寺院の名は正式なタイ寺院としての名前をもっているが、地元で地域の名やそれ以前の名称とむすびついているため、ここでは通称名を優先して記載する。

7. クバンパス（Kubang pasu）地域の寺院

地域の特徴：イスラーム化以降のクダースルタンの都（Kota）はクダー北部からプルリス方面の低地に集中している。この地域には現在の州都でもあるアロースターの他、アロースターとプルリスを結ぶ陸路と運河に沿う旧都コタ・シプティ（Kota Siputih）やコタ・ブキットピナン（Kota Bukit Pinang）があり、いわばマレー王権の中心地を含む。同時に、クダーとシャムを結ぶ朝貢道路であるサイブリー道路が存在しており、クダーとシャム双方の政治経済の中心をむすぶ陸路と水路の交点となる地域である。

1) Wat Padang Sera (Wat Lelee)

正式名称：Wat Bunyaaram

位置情報：北緯 6 度 21 分 44 秒 統計 100 度 20 分 34 秒

標高：11m

立地と景観：寺院の正門は Jitra とプルリス州都 Kanger を結ぶ直線陸路に接する。裏手はクローン（運河）に面する。寺院正面は、海岸部まで続く標高 5 メートル以下の広大な水田地域である。寺院の北西 4 km にある Ko Diang と呼ばれる石灰岩質の突出した岩山（Ko Diang とはタイ語で赤い山の意味）が景観の特徴であり、この Ko（島という意味もある）の連続する景観はタイ南部のプーケットからこの地域まで続く。マレー人集落の多い地域であるが、寺院の近接地と Ko Diang の周辺にシャム人の集落が 2 つある。寺院の裏手の運河から先はやや標高が上がり、森になっていく。1 km 西にクダーの古都である Kota Siputih がある。19 世紀前半にシャムによりこの地域がクダーより切り離され、クバンパスとしてシャムに直属したときのクダー王族の支配者 Tunk Anum の権力の中心地であり、またその墓も寺の 1 km 西にある。付近には福建華人の廟もある。

歴史と伝承：寺院の建造は 1888 年頃とされるが、集落はそれ以前からあり、シャム人と華人がまじって住んでいたとされる。寺院はもと Wat Lelee と名づけられていた。森に住むピー（悪霊）になやまされた村人が南タイから呪術医をよんでお祓いをしてもらったときの南タイ語に由来する名前であるという。それ以来村人がキンマを植えるようになったので、Padang Sera（キンマの野）と呼ぶようになったともいう。このキンマとゴムを植えて財をなした人が寄付をして寺を建てたという。またこの地域のシャム人の先祖はナコンシータマラートやソンクラーからやってきた兵士であるという話もある。

日本軍が1942年にこの地域にやってきて、1944年にはクダー自体がタイ国に返還された。そのときにタイ国からクダー駐在の公務員がやってきてタイ語学校を開いた。1945年にクダーが英領に復帰したときに、寺は一端廃寺になり、新しい名前として Wat Bunyaaram をもらったという。

1950年には、クダー政府がこの寺の住職を正式に認めて寺院に援助金をだした。その援助金に加え、村長などシャム人、華人、ソクラーやブルリスからも援助金を出す人があり、庫裡、講堂、食堂、鐘楼、寺院の塀などを建てたという。

この寺院はその後も1964年にタイ国王から本堂建築の資金援助、またマレーシアのクダー州政府からも増資を受けている。付近のシャム人の集落人口：500名ほど。マノーラ舞踊のグループが有ることでも有名である。

僧 侶：1963年の記録では22名。2009年現在は3名である。

寺院内施設：寺は大きく敷地内の施設も多い。建物は比較的新しいものが多く、最も古い本堂は1977年にクダー州大臣により建て替えられており、この本堂、門、などの様式も現在のタイ国中央部で見られる寺院建築様式である。タイの芸術局の監修を受けており本堂のバイセマーはそれぞれが祠に収まっている格の高いタイ国の王立寺院のような様式である。門前の看板には、寺名がタイ文字、ローマ字、漢字で書かれ、漢字では「文也南仏寺」と記される。寺内の施設は、僧侶の庫裡（コンクリート造り二階建て）、講堂（2003年改築）鐘楼、創立僧侶像、などあり、裏手のサーラーは葬儀のために棺を安置し、僧侶より読経をもらうための場所でもある。講堂内には釈迦の誕生から出家、修行、説教、涅槃にいたる壁画が数枚描かれている。

タイ語の学校がある。鐘楼の前に二本の柱があり、リング

とヨーニのようにもみえ、簡素な国礎柱のようにも見える。大なる柱には黄色の布が巻き付けてあり、小の柱（ピンクの布で覆われている）と白い布で結ばれている。ロイカトーンの祭りが毎年行われるので、敷地に舞台が作られている。



[写真 1. Wat Padang Sera]



[写真 2. 葬儀と霊柩車]

2) Wat Guar Napai (Samnak)

正式名称：Wat Sirinikon Vanaram

位置情報：北緯 6 度 22 分 89 秒 統計 100 度 22 分 89 秒

標高：56m

立地と景観：現在のクダーのタイ寺院の中ではもっとも国境に近い位置にあるが、幹線道路から外れたゴムプランテーション林の中である。1950年代の開拓村である FELDA GUA NAPAI の先の林の中にある。Pdg.Sera と Napoh をむすぶ道の途中に 3 km先の所在を示す看板がある。なお、3 km先の Napoh は、タイ=マレーシアを結ぶサイブリー道路沿いのクバンパスのサムサムの居住地域であり、この地域のマレー人地域ではタイ語を理解するものも多い。

歴史と伝承：FELDA の入植が1959年で、それ以前はただの森であった。

聞き取りによると今40代から60代の村人は入植第二世代で、この寺はFELDAができてから後にこのFELDAの人々によって建設された。FELDAの住民はマレー人が大半でシャム人は34家、120人ほどであるという。

僧 侶：僧侶3名、サミ2名 僧侶2名は南タイから来ている。ソクラー県ナータウィーの寺である。住職がないため、まだ Samnaksom である。タイ人僧侶は、ここで、短期出家者がある場合にやってくるだけなので、3ヶ月ほどでタイの寺といたり来たりしているという。僧侶も村人もタイ語南タイ方言で会話しているがマレー語もはなす。

寺院内施設：コンクリート造りでトタン屋根の臨時の本堂に仏像と誕生日仏8体⁸、庫裡にしている建物、殆どの仏像はタイで購入してきて据えたものだが、外に手作りの仏像と2008年に建てた四面仏 (Prak Phahom) がある。この四面仏をつくるために寄進委員会が作られ、寄進者の名前は全員華人である。



[写真3. Wat Guar Napai]



[写真4. 手作りの仏像]

3) Wat Sungai Bahru

正式名称：Wat Citraram

位置情報：北緯 6 度 15 分 96 秒 統計 100 度 25 分 68 秒

標高：12m

立地と景観：ジトラ（Jitra）の街中にある。ジトラの地名の由来は（Jut thaa）でタイ語では停留港を意味する。タイとクダーを結ぶ朝貢道路サイブリー道路上にある商業中心にあたる。20 世紀前半までは半分くらいの住民がタイ語を理解していたと言われる。道路に並行して 500m の位置にクダー川支流にあたるクバンプス川の水路がある。この寺院はその川に面している。川の反対側には華人の大きな廟もあり、市の中心の商業地区に華人、川の反対側に寺院とシャム人集落という景観である。

歴史と伝承：寺院の建立は 1934 年である。1945 年に Wat Pdg Sera と同じく新しく Wat Citraram の名前に変わった。1963 年の記録では隣接する集落には 300 人のシャム人がいた。現在は 200 人である。集落のシャム人はほぼ 100% タイ語を話しているが南タイ方言のみである。

僧侶：1963 年の記録では僧侶が 3 名いたがその時もタイのナータウィー出身の僧侶であった。2009 年も地元出身の僧侶はおらず、タイから来ている 1 名のみであった。短期出家者が 7 名ほどあるので来ており、寺で集落の子供にタイ語を教えている。

僧侶の食事は村人が 30 日の当番を組んで持ってくるシステムである。また死者を火葬にした骨や灰はタイでみられるように川に流すことはしないで骨壺におさめて寺に保管している。

参拝者に華人も多く、寺の敷地に接地して三寶公の廟があ

り、廟守の住居も併設する。廟内には阿弥陀、大伯公、など7柱が並ぶ。

寺院内施設：Wat Pdg Sera と同じく、タイ国の芸術局の監修する美術様式である。本堂は1979年に立て直されており、バイセーマーも祠に入った様式である。その他に Wihan も新しく2000年代の建設である。寺院の正面に川に降りる広い階段がつくってあり、ローイカトンの祭りでは鐘楼流しも行われる。庫裡、講堂、食堂には観音や関帝などの小寄付像がある。鐘楼の他、ルシ像、布袋像、四面像と象、なども見られる。



[写真5. Wat Sungai Bahru]



[写真6. 寺の面する川]



[写真7. 木造の庫裡]

(クダーにおけるシャム人とタイ仏教寺院：寺院記録 (2) に続く)

(Endnotes)

- 1 Kedah を指す Saiburi は、半島東海岸パタニの南の Saiburi とはタイ語ではことな
って表記し、発音も異なる。
- 2 英国東インド会社は、クダースルタンと独自の交渉をおこなって、もとクダー領であ
る、ペナン州とウェルズレイ州（現 Sebrang Plai）をクダースルタンから年金と引換
に貸借しており、食糧、水などの補給はクダーに大きく依存していた。そのため、シャ
ム軍がクダーを占領すると、クダーとシャムの不和の問題を早急に解決するべき必要
があった。
- 3 この条約の現実的な意味は、シャムに対し、ペナンへの食糧や水の補給を確保、確約
することと、クダーに勢力を広げようとするナコンシータマラートの牽制であった。
- 4 シャム人の寺院とその分布については、拙稿「サムサムとシャム人」において1985年
の寺院リストをもとに簡単な分布と地図を示したことがある。沿岸部のマレー人との
一種の棲み分け状況については次稿にて考察する。
- 5 タイ仏教寺院の分布はクダー州、クランタン州、ペラ州がそのほとんどをしめる。マラッ
カ、ジョホール、クアラルンプル、セランゴール州の寺院はほぼ1から3しか存在し
ない。
- 6 クダーの上座仏教寺院は、タイ国内の寺院と異なって国家的制度としてのサンガの縛
りを受けない。また、イスラーム国家であるマレーシア内では、非イスラームの宗教
集団、たとえば、華人系のマレーシア仏教協会のような全国規模の団体は、集會法に則っ
て結社として登録し、財務報告をしなければならない。
- 7 シャム政府はクダーのシャム人のように古くからの住民である集落と寺にはこのよう
な強制破壊は避けるようにとクダー州政府に申し入れていた。しかし、実際に作業を
行った英領マラヤの国境警備隊はいくつかの寺を焼き払ってしまっており、そのこと
は後からクダー州とシャム政府との国際問題となり、クダー州政府が一部の寺院への
賠償を行った。
- 8 タイ人の文化では何曜日にも生まれたか、が幸運のシンボルを決めるための重要な要素
である。誕生曜日は月曜、火曜、水曜の午前、水曜の午後、木曜、金曜、土曜と8つ
に分けられているので、シンボルは8つとなる。仏像もそれぞれ様態がきまっており、
通常この8つの仏像のセットをタイから買ってきて据えている。

追記：本稿は科学研究費による調査「マレー境域におけるタイ人コミュニティの研究」（課題番号19510253）2007-2009による成果の一部である。

参考文献

Cheah Boon Kheng 1988. *The Peasant Robbers of Kedah, 1900-1929: Historical and Folk Perceptions*, Oxford Univ Press,

Kobkua Suwannathat-Pian, 1989. *Thai-Malay Relations: Traditional Intra-Regional Relations from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries*,

Oxford University Press.

黒田 景子, 1995 「サムサムとシヤム人-ケダ-における Thai-speaker 小史」, 『南方文化』, 22, 44-61.

Thamrong sak Aayuwathana 1974. *Thai nai Malaysia* Roong phim kan Sasana Krungthep <http://www.mir.com.my/leofoo/Thai-amulets/index.htm> (2009年11月2日 参照)